

# 築上町歴史散歩

築上町教育委員会文化財保護係 TEL 0930-52-3771  
〒829-0106 福岡県築上郡築上町大字船迫 1342-22

## Chikujo Town History walk Vol.2

ウェブサイト [築上町歴史散歩](#) [検索](#)

### 旧藏内邸のもうひとつの見どころ、三子銅像広場

旧藏内邸と同時に整備された周囲の施設とその配置にはストーリーがあり、藏内保房の想いが込められている。城井川のせせらぎを背に田園風景を臨み、県道前の「藏内次郎兵衛六世之孫 藏内保房」と刻まれた大鳥居をくぐり、まっすぐ長い参道を進み、産土神の貴船神社に至るアプローチ。そして隣接して造営された生活と接客空間の大邸宅が広がる。さらに延長線上の丘陵の一角に藏内、久良知家の墓所と一族を顕彰する三子銅像広場があり、村を一望するように三人の銅像が立つ。

銅像は戦争で金属供出され失われたが、壮大な規模の石垣に銅像台座とレリーフや陶製の銘文、鬼面や雷文の意匠が施された壁面など個性的空間が残されている。

銅像の配置は保房が一族を顕彰する想いで、中央は一族を代表する保房の妻の祖父である久良知重敏、向かって左は育ての親の藏内次郎作、右は妻の父、重敏の長男の久良知政市である。そして台座レリーフには筑豊炭坑の堅坑櫓や煙突、積出港の風景に採掘のツルハシとカンテラを持った神像が、別のレリーフはここ深野村の農村風景に稲穂と鎌を持った神像が描かれる。入口正面には三人の事績と讃えた碑文が埋め込まれる。これらから藏内氏の出自である農と故郷、そして生業の炭鉱への感謝の想いが伝わってくる。三子銅像碑文と大鳥居とも大正8年5月の銘がある。

銅像の作者はこれまで鎮西公園(田川市)の藏内次郎作銅像が朝倉文夫作と判明していたため、この三子銅像も朝倉文夫と推定されていたが明確な根拠はなかった。しかし近年の調査で、『帝国絵画新報』(大正8年10月)に、朝蔭其明(1885~1949)が藏内次郎作の銅像製作に取りかかるとの記事があり、その可能性が高いことが分かった。しかし銅像本体の写真がまだ未発見のため確定はできてない。



三人の銅像台座



邸宅進入路を兼ねた神社参道の石橋



藏内次郎作銅像台座とレリーフ



久良知重敏銅像台座とレリーフ



久良知政一銅像台座とレリーフ



旧藏内邸遠景(正面下の鳥居から神社と邸宅・奥が銅像広場)



旧藏内邸遠景



銅像広場全景(最上段に3人の銅像が並ぶ)



銅像広場正面中央の銘文(磁器の文字を嵌め込む)

## 国指定名勝 旧藏内邸をもっと知ろう！ 炭鉱王 藏内家の歴史

### 藏内家の歴史

明治から大正時代に炭鉱主として繁栄し、大邸宅を造営した藏内家。古くは鎌倉時代から豊前国を治めた鎮西御家人、宇都宮氏の家臣として下野国から下向した一族といわれ、戦国時代には宇都宮鎮房の家臣に藏内若狭守の名がある。藏内家は江戸時代以降、武士の身分を捨て帰農した。旧藏内邸に隣接する貴船神社の燈籠には、享保6年(1721)上深野村庄屋藏内彌治兵衛、また明和7年(1770)の鳥居(下写真)には藏内次郎兵衛、また古文書にも藏内次郎兵衛・藏内伝右衛門、藏内文平、藏内治平など姓を名乗る庄屋で、地域の有力者であった。

### 久良知家の人々、そして藏内一族

筑豊の炭鉱経営者として、藏内と久良知の名が知られるが、かつて一族は藏内と書いて「クラチ」と読んだ。しかし明治10年の西南戦争の前、一族の一人が反政府運動に同調し出奔したため、小倉県の官人だった久良知重敏は一族に罪科が及ぶことを案じ、久良知(クラチ)の万葉仮名を当て別家を起こした。一方、藏内家はその後「クラウチ」と読むようになったという。

久良知重敏(1828~1909)は幼名を治市、のち治郎兵衛(次郎兵衛)、次郎治、重敏を名乗った。慶応元年に38歳で安武手永、椎田手永の大庄屋を務め、明治維新前後には豊津藩、豊津県、小倉県に出仕して地租改正などに従事、小倉県では財政再建に尽力し、明治8年に退官した。小倉県退官後は資産を投じて米穀商に転じたが、明治16年に長男政市(1848~1888)を田川郡弓削田起行坑区に派遣し炭鉱経営に乗り出した。そして京都郡の豪商柏木勘八郎、柏木の叔父の井上馨とも接し、貝島太助を支援するなど筑豊炭鉱の礎を築いた。明治26年には官営製鉄所建設の情報を得て、門司の大里の陣ヶ尾で鉄鉱石を採掘し、また66歳でシベリア遠洋漁業事業に着手するなど、優れた起業家であった。

重敏の長男政市は明治21年、40歳で亡くなり、四男の寅次郎(1866~1902)が跡を継いだ。寅次郎は弓削田村の川宮の起行、小松、そして添田村にも坑区を広げ、明治31年に衆議院議員に当選したが、明治35年に大阪でコレラに感染し37歳で亡くなった。

寅次郎の跡は亥一郎が継いだ。寅次郎の従弟、利久蔵は明治3年には築城郡下香楽村の庄屋で、数理の才能も有り、寅次郎亡き後は炭鉱経営に参画し、伊方、夏吉、伊方などで坑区をもち、また重敏の出資で新式の浚渫船を発明し製造した。利久蔵の長男重彦は後藤寺などで坑区を所有し、後に藏内炭業株式会社の炭業代理人となった。

### 藏内家、久良知家の炭鉱経営

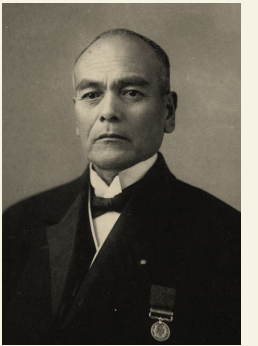
藏内次郎作は30代半ば、米相場に失敗し散財すると、先に炭坑に着手していた久良知政市と甥の保房を頼り筑豊に赴いた。最初に採掘したのは後藤寺村宮床の「崩し」炭坑だが、名が悪いので近くの上弓削田村峯路の地名を取り「峰地炭坑」とした。

次郎作と保房は明治23年に金田坑(田川郡)、26年に足立炭坑(企救郡)、そして黒川坑、京殿坑(遠賀郡)を採掘し、35年には久良知重敏、寅次郎が明治28年頃に開発していた添田村に進出し、雷(いかづち)で採掘した。添田でも評判の良い後藤寺の峰地炭坑の名称を使い「第二峰地一坑」とした。さらに添田村岩瀬の峰地二坑、大任炭坑、大峰炭坑と添田村一帯で規模を拡大していった。また一族では藏内熊槌が庄内や水巻で採掘した。

藏内、久良知一族は重敏を筆頭に、次郎作、保房をはじめ一族共同で炭鉱事業を発展させ、明治40年代から大正時代にかけて急激に成長していった。明治23年、保房は政市の長女ユキ(のち千鶴子)と結婚し、25年に長男次郎兵衛、翌年二男の正次が生まれた。



藏内次郎作(祖父)



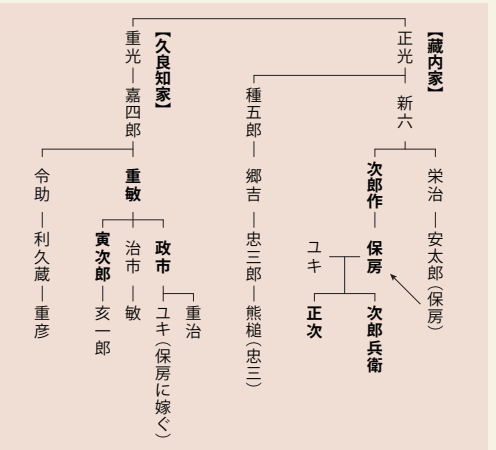
藏内保房(父)



藏内正次(次男)



藏内次郎兵衛(長男)



藏内・久良知家系略図

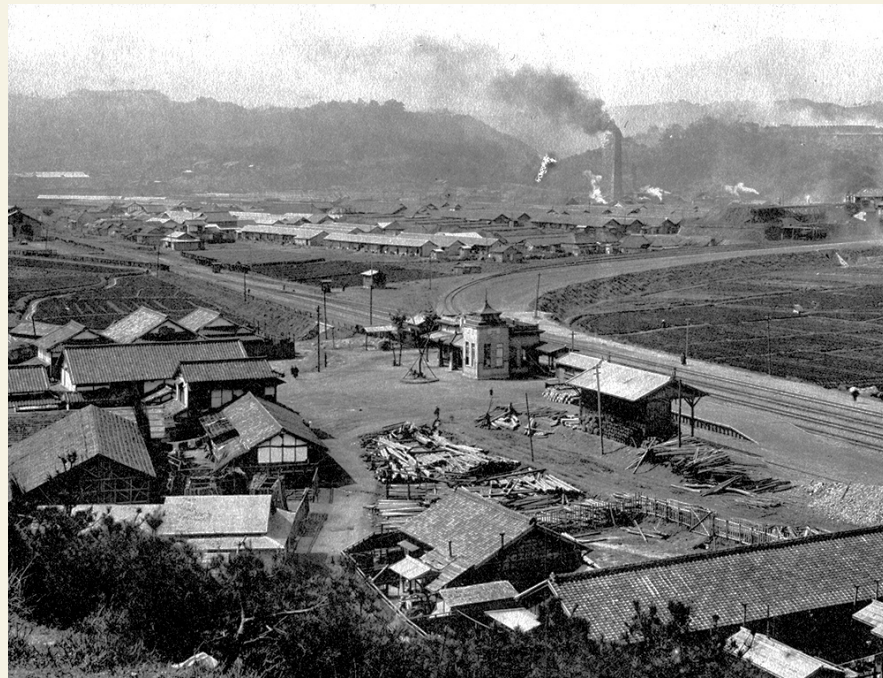


貴船神社鳥居(明和7年)藏内次郎兵衛寄進

### 参考文献

- 『藏内次郎作翁餘影』(大正13年 岩崎高蔵編)
- 『藏内保房小伝』(1961 瓜生敏一 田川高校)
- 『久良知重敏翁の実歴談』(明治31年門司新報:昭和34年門司郷土叢書)
- 『添田町史』「郷土の石炭産業と藏内炭業株式会社」(1992 安藤龍生)
- 『尾平炭山誌』(2004 緒方町歴史民俗資料館)
- \*肖像及び炭坑写真は『藏内保房追悼寫真帖』(大正11年)による。



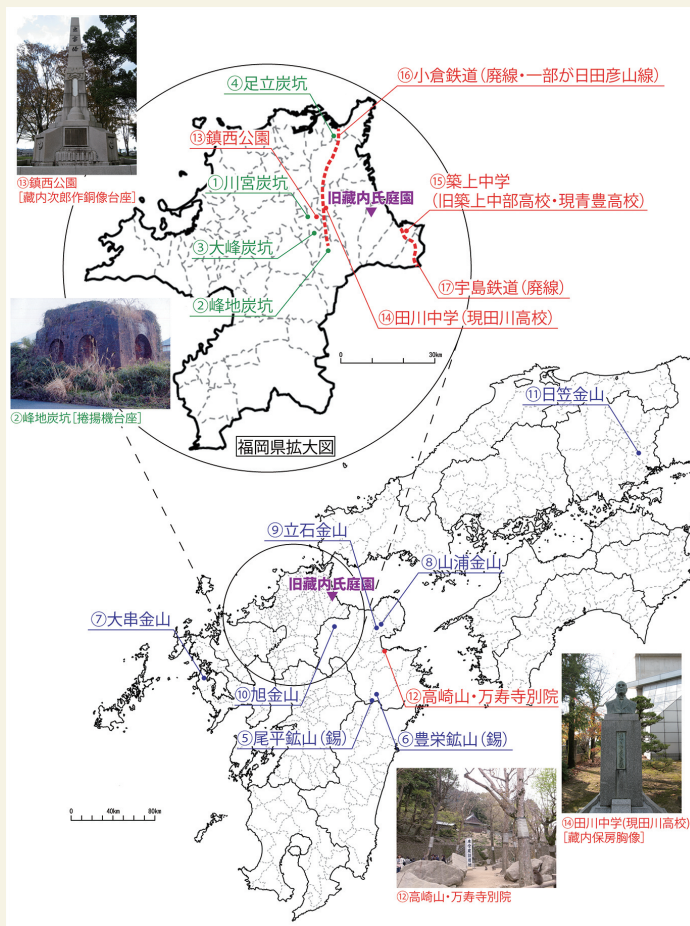


主要炭鉱・峰地第一坑と小倉鉄道(大正時代) ※写真中央は添田駅

## 藏内鉱業株式会社の設立

次郎作は大正4年(1915)、石炭輸送の効率化を図り、小倉鉄道(現在の日田英彦山線・添田線)を添田まで開通させた。また保房は田川銀行を設立し、大正5年には藏内鉱業株式会社を創立し社長に就任した。経営規模は明治44年に藏内保房名義で全国第10位、大正8年には藏内鉱業で全国6位の産出高をあげ繁栄を極めた。しかし大正10年に保房が59歳で逝去、大正12年には次郎作も77歳で亡くなった。

大正13年の『日本礦業名鑑』には社長は次郎兵衛、常務取締役正次、取締役久良知重治、久良知敏の名で全国第9位の産出高をあげ、昭和3年も第10位を確保している。しかし昭和14年に主要炭坑の峰地・大峰炭坑を古河合名会社に譲渡、藏内鉱業株式会社は解散し、炭鉱経営から手を引いた。



藏内家の鉱山とゆかりの地

金山では大串金山(長崎県西彼杵郡)が大きく、立石金山と山浦金山は大分県速見郡(杵築市山香町)の成清博愛の馬上金山の周辺に分布する金山である。旭金山は中津市山国町の草本金山で、昭和10年頃に栄えた金山である。

藏内・久良知家の鉱業経営は明治16年(1883)頃に始まり、昭和34年(1959)の尾平鉱山の閉山までの77年間であるが、その前半はまさに炭鉱の最盛期であった。保房の亡き後は炭鉱で得た膨大な資金で取得した山林の鉱山開発で、次郎兵衛、正次兄弟を中心に金属鉱山へと特化し、藏内尾平鉱業所を経営した。

## 炭鉱から金属鉱業へ

会社解散以降は宝珠山村などで炭坑を所有するが、藏内尾平鉱業所(大分県大野郡)の錫鉱山が会社経営の主力となる。

大正8年刊行『藏内次郎作翁餘影』には「既に石炭採掘は卒業したから将来金山経営に歩を進むべく…(中略)金銀鉱区を買収せるもの大分県兵庫県岡山県鹿児島県長崎県熊本県に渉り其鉱区五百九萬三千八百五十七坪に及び又曰く、自分は一面に林業の計画に着手し…」とあり、既に鉱山開発のため519万坪余りの土地を取得し、鉱山経営と山林事業を考えていたようだ。

その証拠に大正13年の藏内家の帳簿に、主要炭鉱の川宮炭鉱と峰地炭鉱のほか、尾平錫山のほか5つの金山が記載されている。保房は明治30年には尾平の借区権の譲渡を受け、小倉市の守永半兵衛と共同で錫鉱の採掘を試みた。大正8年、長谷川村84,224坪の鉱区をもち、昭和8年には九州水力電気の発電所操業により生産額が急上昇したが、昭和18年、戦時統制で錫の採掘を停止し、鉛と亜鉛の採掘に転換した。昭和21年、藏内尾平鉱業所は一時閉山したが、戦後の高度経済成長に向けて、昭和31年から鉛と亜鉛の採掘を再開したが、昭和34年に閉山した。産出量や品質を十分確保できず、また鉱害問題にも悩ませられたようだ。



藏内尾平鉱業所(大分県豊後大野市・旧緒方町)

## 藏内家三代の生涯と功績

### 藏内次郎作(1847~1923)

生まれつき豪傑な性格で、幼少期から餓鬼大将で相撲や喧嘩が好きだった。勝負ごとを好み将棋は唯一の楽しみという。また競馬、米相場、株式投資など何でもやったという。炭鉱が軌道に乗ると次郎作は経営を保房に任せ、明治41年から5期にわたり政友会から衆議院議員を務めた。痛烈な野次や体を張った議場での活躍ぶりは「衆議院のライオン」と呼ばれた。

のち横浜倉庫の株買い占め事件や、東京農工貯蓄銀行から損失融資など、株の失敗と銀行や企業との癒着は、政治家として信頼を落とすこととなった。藏内鉱業は当時資金繰りに窮しており、「大正13年藏内家貸借対照表」に東京損失金4,149,999,120厘とあり、次郎作の損失金であろう。その一方で日常生活は質素倹約で、粗食で車も持たず、夜行でも寝台ではなく客車に乗った。また洋服の襟の擦れを下女に墨を濃く摺らせて塗らせたというエピソードもある。

小倉鉄道や宇島鉄道の出資など公共事業には尽力し、人々の安らぎと娯楽、体の鍛錬のため、大正10年に広大な鎮西公園(田川市伊田)を建設し田川郡に寄付した。また本人は固辞したが、多くの人の寄付により彫刻家朝倉文夫制作の次郎作の銅像が建設された。次郎作は大正12年7月18日、東京にて77歳で亡くなった。

### 藏内保房(1863~1921)

幼名は安太郎。7歳で母カツ、14歳で父栄治と死別し、叔父の次郎作の養子となった。9歳で京都郡の大橋洋学校でカステールに英語を学んだ。生まれつき温厚誠実で、次郎作の豪傑さと保房の細心緻密さが合わさって炭鉱経営が成功したと言われる。

保房は信仰心が厚く、各地の神社をはじめ、隣の貴船神社や中津城内の宇都宮鎮房を祀る城井神社も大正時代に再興した。また教育に熱心で、明治30年頃、小倉町に「育盛座」という劇場を開設し、その収益を教育事業に充てた。そして地域の学校建設をはじめ、大正6年には田川中学(田川高校)と築上中学(築上中部高校・現青豊高校)創設にそれぞれ11万円(設立費の約三分の一)を寄付した。田川高校正門の左手には昭和36年、保房の胸像が建設され、今も登下校の生徒を見つめている。また建物や庭園に見られるように、趣味は書画骨董で山水画を好み、田能村竹田の蒐集家として有名であった。保房は持病の腎臓炎がもとで、大正10年8月21日に59歳で郷里上深野にて亡くなった。

### 藏内次郎兵衛(1892~1967)

生まれつき体が弱く豊津中学を中退し、20歳で保房のもとで炭鉱経営に携わった。温厚な性格で臨済宗妙心寺派の万寿寺(大分市金池町)の奥大節に帰依し、昭和4年、万寿寺別院建設のため高崎山(大分市)の土地7万坪を寄進し、翌年には山を開き観音堂が建設された。この高崎山は鉱山開発(金山)のため次郎作、保房がいち早く取得していた可能性が高い。また黄檗宗の広寿山福聚寺(北九州市小倉北区)の支援者で、煎茶の趣味は寺の影響であろう。次郎兵衛は昭和42年8月24日、小倉富野の長男康長氏宅で亡くなった。

### 藏内正次(1893~1951)

保房の次男。豊津中学を経て早稲田大学に入学、大正2年に中退して炭鉱事業に携わり、保房亡き後は専務取締役として、社長次郎兵衛を支え、会社を切り盛りした。大分県の九折鉱山、豊栄鉱山は長男の正臣が継承した。昭和26年8月30日小倉富野で亡くなった。



藏内本家で使われた錫製の茶托と神酒徳利(尾平鉱山産の錫であろう)



藏内次郎作銅像台座(鎮西公園:田川市)



藏内保房銅像(田川高校)



藏内保房夫妻供養塔(添田町)



高崎山



万寿寺別院(大分市高崎山)



築上中学本館(大正11年) ※『月桂樹』(2005 築上中部高等学校)